

インドの馬と天馬

森 雅秀

はじめに

インドの宗教や美術において、一般に馬は牛や象ほど重視されない。インドを旅すると、市街地でも田舎でも、いたるところで牛に出会う。ヒンドゥー教徒にとって、牛が重要な動物であることは誰もが知っている。象もまた、インドの代表的な動物のイメージとして連想されることが多い。しかし、古代以来、馬も神聖な動物と考えられていたことは、たとえばアショーク王の石柱（図 1）に刻まれた四種の聖獣のひとつとして、牛、象、獅子と並んで馬も表されていることから確認できる。

王権と結びついた馬

インドの代表的な古典語であるサンスクリットには、馬を表すことばに *aśva* と *haya* がある。このうち、*aśva* からの派生語として、ヴェーダ文献に登場する双子の神アシュヴィンや、聖なる樹木として儀式などで頻繁に用いられるアシュヴァッタなどがある。古代のインドにおいては *haya* よりも宗教や神話との結びつきが顕著である。

その中でも「アシュヴァ」を含む最も重要な宗教用語は「アシュヴァメーダ」（馬祠祭）であろう。インドでは、紀元前二千年頃からアーリア人の侵入が始まったが、彼らはヴェーダと総称される聖典群と、それにもとづく壮大な祭式のシステムを有していた。アシュヴァメーダはヴェーダ祭式の中でも、特に重要な王権儀礼であり、国王の即位儀礼として行われた。犠牲とされる駿馬が放たれ、一年間、領国内を自由に移動する。これを国王の精鋭たちに率いられた軍が守り、それと同時に祭場での祭式も断続的に行われる。最後には、放たれていた馬が供犠され、新王に灌頂が与えられる。

このように、アシュヴァメーダは古代のインド社会において、馬が王権と結びついた動物であることをよく示す儀礼であるが、馬は戦車 (*ratha*) の一部として、実際に王の進軍や戦闘の場面で活躍した。この場合の戦車というのは、屋根のない駕籠状の荷台を二頭あるいはそれ以上の馬がひく馬車のことである。仏教でも釈迦が王族の生まれであることや、前世においても王であった物語が『ジャータカ』（前生譚）に多数含まれていることから、戦車に乗った姿で表現されることもある。サーンチー第一塔北門には、釈迦の前世の物語のひとつ「ヴェッサンタラ・ジャータカ」が、絵巻物のように表現されているが、そこでは、国を追われて森に追放されるヴェッサンタラ王子（釈迦の前生のひとつ）が、妻と二人の子どもとともに、戦車に乗って進んで行く光景が克明に描かれている（図 2）。

王権と結びついた馬は、インドの理想的な王である転輪聖王の七宝のひとつとしても登場する。転輪聖王というのは、文字通り「輪を転じるもの」の意味で、ここでは戦車を駆って世界を制覇する王というイメージがある。転輪聖王には、その王権を象徴する七宝がつねに付随するといわれ、その中のひとつに馬宝がある。転輪聖王とその七宝は、南インドのアーンドラ地方で好んで表現され、王の周囲に七宝を配した作例や、ストゥーパ（仏塔）を表した浮彫の中央に、このモチーフを組み込んだものなどがある（図3）。

転輪聖王の輪は、太陽のイメージでもある。太陽は日輪とも呼ばれるように、放射状に放たれた光線が、車輪にたとえられる。また、毎日、天空を移動するその動きも、車による運行を想起させることから、太陽神は馬にひかれた車に乗ったイメージでしばしば表現される。ギリシャ神話のアポロンがよく知られているが、インドでも太陽神スーリヤがそれにあたる（図4）。ヒンドゥー教の図像の伝統では、スーリヤは七頭立ての馬車に乗り、両手に蓮の花を持った姿で表される。

シルクロードの要衝のひとつとして、また近年では、イスラム教過激派による大仏の破壊で知られるバーミヤーンには、有翼の四頭の馬がひいた戦車に乗る太陽神の壁画（図5）があった（現在は破壊されて消失）。そのイメージは、インドのスーリヤと多くの点で共通するが、細部において、イラン系の太陽神ミスラからの影響も顕著とされる。とりわけ、有翼の四頭の馬は、イランの聖典『アヴェスタ』と密接な関係を持ち、さらに、西方のヘレニズム世界ともつながっている。もちろん、ギリシャ神話に登場するペガサスがそれであるが、さらに、頭と翼が鷲で、胴体が獅子の形をしたグリフォンとも図像的に関連する。

インド内部では有翼の馬が単独で信仰されたり、スーリヤが乗る車をひくことはないが、グリフォンのイメージは大いに流行した。インドではヴィヤーラあるいはヴィヤーラカなどと呼ばれ、ヒンドゥー教の寺院装飾などに好んで用いられる（図6）。仏教でも仏陀の座る台座の左右に、装飾的に表現される像が、グプタ朝以降現れる。仏陀のそなえている王者的なイメージが、王権の象徴でもある玉座の一部として、グリフォンを取り入れたのであろう。獅子や象などと上下に重なるように表されることも多く、アショーカ王の石柱以来、聖獣としての馬の性格を引き継いでいる。

騎馬の勇者

バールフットやサーンチーでは、ストゥーパの周囲を取り囲む欄楯の装飾として、馬にまたがる王侯や勇者の姿が刻まれている（図7）。王家の生まれである釈迦にも、颯爽と馬にまたがる勇者というイメージがしばしば与えられる。もちろん、それは出家するまでのことで、家も財産も捨てて修行を始めてからは、馬とは無縁となる。その区切りとなる出家験城の場面は、人々が寝静まった深夜の城からひそかに抜け出す太子を表すが、ここで用いられる乗り物も馬

である。もっとも、馬に乗って勇ましく出城したならば、周囲の者たちに知られてしまうので、その四本の足を四天王がかかえて、ひづめの音が出ないようにしたと、多くの文献は伝えている。しかし、四天王という従者を引き連れて、馬に乗って城を出る釈迦のイメージは、まさに戦場におもむく勇者の姿であろう。出家踰城の場面は、サンチー第一塔東門に壮大な作品があるほか（図8）、ガンダーラでも好まれたテーマである。

この場面との関連で、釈迦の乗った馬やその御者が、釈迦と同じ日に生まれたという伝説を表した作例もある。このほか、馬の登場する仏伝の場面としては、四方の城門から外に出て、病人、老人、死者、そしてバラモン僧と出会い、世の無常を知った四門出遊が有名である。あるいは、誕生後に城に戻る場面や、涅槃の後の分割した舍利を運ぶ国王の行列を描いた「舍利運搬」でも、馬は重要な役割を果たしている。祝祭的なパレードの雰囲気を持ち、騎馬の華やかな姿を感じさせる。

釈迦の前世の物語でも、馬が重要な役割を果たすものがいくつかある。南の海で船が難破し、羅刹の島に漂着した商人たちを、空を駆ける「雲馬王」が救出する「雲馬王ジャータカ」もそのひとつである（図9）。ヒマラヤの山中に生まれ、はるか南の島（シンハラ、すなわちスリランカともいわれる）まで、空を飛んでいくこの馬が、釈迦の前生であった。この物語はその後さまざまな展開をとげ、釈迦の前生も馬の方ではなく、商人の首領となったり、さらにその首領によるシンハラ島征服の物語が後に加えられるようになる。アジャンター第一七窟には、このシンハラ物語を描いた大規模な壁画がある。さらに『法華経』「普門品」あるいはこれを独立させた『観音経』において、人々を苦難から救う観音の姿のひとつとして、この物語が取り入れられ、わが国に残る「観音経絵巻」や「法華経扉絵」などに、商人たちを救う馬の絵がしばしば描かれるようになる。

このほか、「ヴィドゥラ賢者ジャータカ」にも、ヤクシャの若者が馬に乗って、人間の世界とナーガ（龍）の世界を往復するという場面で、馬が登場する。パールフットの欄順装飾に、この場面を表したプリミティブな作例があるほか、アジャンター第二窟にも大画面の壁画がある。この物語でも馬は空中を駆ける能力を有している。

仏伝文学のなかに「アヴァダーナ」と呼ばれるジャンルがあるが、そのひとつである「スマーガダー・アヴァダーナ」には、翼のついた馬が登場する。祇園精舎を寄進した有名な給孤独長者に、スマーガダーという美しい娘がいた。ジャイナ教の信者であった別の長者の家に嫁いだ彼女が、異教の修行者たちに奉仕することを拒み、釈迦に祈願すると、はるか遠くから釈迦が、その弟子たちとスマーガダーの婚家に飛来し、長者をはじめ、その地の人々を仏教に改宗させたという物語である。この飛来する弟子たちのひとりが、乗り物として有翼の馬に乗っている。

スマーガダーの物語はアヴァダーナ以外にもいくつもの伝承があり、漢訳経典としても何種

類か伝わっている。とくに中央アジアで流行したことも知られ、敦煌、キジル、トヨクなどの遺跡に、この物語を描いた壁画が残されている。そこでは、翼の生えた馬に乗る僧侶の姿も描かれている。勇者の姿とはほど遠いが、苦難に陥った若い女性を救出するために、颯爽と現れる「白馬の騎士」であることにはかわりはない。

神格化された馬

馬そのものを信仰の対象としたり、その像を刻むという事例は、インドの場合、あまり顕著ではない。馬のほとけといえば馬頭観音が第一にあげられるが、インドでは明らかに馬頭観音と確認できる作例はこれまで見つかっていない。インド密教の文献の中には、観音の脇侍として「馬の首を持つもの」という意味の「ハヤグリーヴァ」の名をあげるものがあり、それに対応する作例も知られているが（図 10）、そこに登場する「ハヤグリーヴァ」は、首から上が馬であったり、日本の馬頭観音のように、頭頂に馬の首をおくこともない。

「ハヤグリーヴァ」という名称は、ヒンドゥー教の神ヴィシュヌの異名として、すでに知られていたらしいが、ヴィシュヌがハヤグリーヴァの姿で表されることはめずらしく、猪や獅子など、他の動物の姿をとった化身の方が広く好まれた。

動物の頭を持つ神としては、象頭のガネーシャが圧倒的な人気を誇るが、ここでも宗教的な動物としては、馬がそれほど重視されなかったことがうかがわせる。ただし、まったくなかったわけではなく、たとえば、ダッカ博物館の所蔵する一一世紀頃の忿怒形の女尊像（図 11）は、パルナシャバリー（葉衣）に比定されるが、その足元に、頭が馬の人物と、馬にまたがった苦行者のような人物が登場する。いずれも名称は不明であるが、民間信仰の神として、馬の神が信仰された地域もあったようである。